



奨学金制度の針路

すずき ようこ
鈴木 庸子

●在イタリア 日伊通訳・翻訳家

イタリアにおける奨学金は、公私を問わず給付型が基本となっている。本稿は、この事情を前提としていることを踏まえていただければ幸いである。

.....

新年会で、娘の小学生時代のクラスメート（男）のママ友と再会した。邂逅を喜び、新年を祝った後は、お互いの子供がこの夏高校卒業を控えている者同士、彼らの秋からの進路の話となった。

「息子の第一志望は、〇〇大学。去年の冬、あそこの所属研究所の高校生向け短期講座に行って、気に入ったって」

「あの講座、入試が厳しいって聞いている。さすがだね」

「実は大したことはないの。本当のネックは、入試じゃなくて研修費。うちは、まぐれでもらえた奨学金のおかげでなんとか送り出せて、助かったわ」

「入試だけでなく、奨学生テストまでパスしたの？××君、賢いうえに、もう親孝行までしてるわけ！」

「本当にたまたまよ。ただ、奨学生の条件が『他の学生と同様、指定日までに研修費（＝奨学

金対象額）を納入し、つつがなく修業した後に、その払い戻しを受ける。期日以内の振込が確認されなかった場合、奨学生資格は抹消』だったから、予定外の結構まとまった額を揃えなきゃいけなくなって、大変だったの」

数十万円の奨学金を、高校生である奨学生側が前払いする——そんな話があるだろうか？

この条件を提示された時、彼女の頭を真っ先にかすめたのは「詐欺の可能性」だったと言う。さもありません。

「でも、詐欺であろうがなかろうが、もし入金しなかったら、息子からすれば『奨学生のポストも勝ち取った夢の講座への道を、理解のない親に閉ざされた』ことになる。親子の関係に亀裂が入るのは、目に見えてるでしょ」

「... 親としては、お金かき集めて、払うしかないね」

件の講座事務局の対応は、丁寧かつ敏速だったそう。しかし、悲しいかな「このご時世、それがかえって怪しいと思えなくもなかった」とのこと。ごもつとも。



「そもそもなんで奨学生が、免除された料金を、他の学生と同じ条件で払わないといけないわけ？」

「それ、息子も問い合わせたの。そしたら、先方は即座に翌日のオンラインミーティングを設定してくれて。ご丁寧に、『よろしければ親御さんもどうぞ』ってメッセージ付けて。いざ息子と2人でミーティングに臨んだら、『未知の環境で初めて出会う仲間や先生とともに学ぶ受講生に何よりも必要なのは、やる気。特に、ある種シンボリックな存在である奨学生には、これは大いに期待されるポイントとなる。しかし、あらゆる奨学金制度において、選ばれたとたんその権利に胡坐をかき、どうせただだからとなめた態度で参加する奨学生が散見されるのが実情。そういう輩は往々にして、物事を吸収しようという意志が希薄で、他の学生や講座にとって迷惑な存在となる傾向が強い。我々は、そんな学生——たとえ秀才であろうと——よりも、当講座に対応できる能力を備え、柔軟かつ前向きな姿勢で臨む人材に、奨学金制度を介し学ぶチャンスを与えるべきだと考える。他の学生と等しい条件での研修費納入は、本講座に対する本気度を証明してもらうための担保と考えて欲しい』的な話を、丁重にされて…。その後で『我々としては是非××君に来て欲しいし、滞りなく修了すれば、所定の手続き後の全額払い戻し

は請け合う』って締めくくられたら、もう、『お時間ありがとうございました』しか言えなかった」
「… 一理あるか」

結局ママ友夫婦は「俎板の鯉の境地で」期日内に研修費を納入し、息子君は憧れの講座に奨学生として参加。期待以上に素晴らしかった講座を全力で満喫し、前述のとおり第一志望校も確定。懸案の奨学金も、事務局の万全のサポートのもと、スムーズに全額返金されたとのこと。

「終わり良ければすべて良し。我が家の家計には高嶺の花の講座だから、奨学金がなければ息子ははなから諦めるほかなかったわけで、その制度があること自体は本当にありがたかった。私の学生時代には、一旦払った後に払い戻される奨学金なんて聞いたこともなかったから、この条件を聞かされた時はかなり面食らったし、振込前後は、疑心暗鬼で胃が痛かったけど」

と彼女が笑うと、「私達も、似たような条件を振られたの」と、近くに居合わせた夫婦が声をかけてきた。

彼らが提示されたのは、「公務員とその家族を対象とした、国立社会保障機関の某奨学金制度に

合格した場合、まず奨学金分全額を納め、対象講座その他を修了したら、所定の手続きを経て払い戻しを受ける。学生が講座をドタキャン・途中放棄したような場合は、奨学生資格喪失で返金なし」というものだったそうだ。この夫婦はともに公務員で、自身の子供を夏休みにイギリスの語学学校に通わせるため同奨学金制度を検討したが、「身寄りもない外国に居合わせて、環境が全然合わなかったり、万が一とんでもない学校だったりしても、奨学金を返して欲しいがために帰れないような破目になったら、本末転倒」ということで、結局は応募を見送ったという。

我々の会話は、「ある種の短期講習・留学を対象とした奨学金制度を、奨学生側のいわば立て替えから始まる形にシフトする動きが、イタリアに存在しているのかもしれない」ということで一段落した。これはあくまで我々の推測だが、もしそうであれば、(一時的にせよ)ある程度のプレッシャーに耐えうる程度の経済力を備えていることが、一部の奨学生の不文律となろう。因みにこのママ友の場合は、この国の平均月給の2～3ヶ月分であった。

奨学金制度の基本理念とは、「家庭の経済事情

にかかわらず、学生個人に学ぶ機会を保障すること」ではないだろうか。それに則れば、この不文律は、存在そのものが矛盾となる。しかし、矛盾を内包した奨学金が、その条件を戸惑いつつも受け入れたママ友一家に恩恵をもたらしたことは紛れもない事実であり、その実利・有効性は、彼女の言葉、そして何より、奨学生当人の志望大学名に明らかである。大学も、このシステムを介して、より有望かつ理想的な学生を精選・リクルートできた。つまり当事者たちは全員、メリットがデメリットを遥かに凌ぐことを実感しているわけだ。

もしかしたら、この立て替えシステムは、奨学金制度におけるアップデート——あらゆる制度が折々に必要とする——の試みかもしれない。これが最上なのか、定着するのか、はたまた別のタイプが登場するのか否かは、娘たちとそれ以降の世代が、身をもって見定めてくれよう。いずれにせよ、シンプルな給付型奨学金制度を頼りとでき、これを享受した世代としては、この制度が、現代の学生たちにとっても、少々形を変えようとも、同様の存在であり続けてくれることを祈る。